

魂の階梯論における聖書解釈

—アウグスティヌス『マニ教徒に対する創世記註解』研究敘論—

上村直樹

序

この小論において筆者は、アウグスティヌス初期の聖書註解書『マニ教徒に対する創世記註解 (*De Genesi contra Manichaeos*)』(ⅡGM)を取りあげる⁽¹⁾。そして、相互に関連する二つの主題を設定する。その第一は、この註解書のなかで実践される聖書解釈の方法についてである。この主題においては、アウグスティヌスの聖書解釈の方法として対比的に語られることが常である、字義的な解釈法と比喩的な解釈法の差異を論ずるだろう。その第二は、この註

解書に設定されている読者についてである。この主題においては、その読者が、第一の主題の考察によって析出される聖書解釈への取りくみを勧められる所以を探ることによって、第一巻末尾における魂の靈的な階梯についての記述の意義を論ずるだろう。

第一節 『マニ教徒に対する創世記註解』の問題性

アウグスティヌス研究において従来、このGMを集中して論ずることは少なかつた⁽²⁾。その所以は何か。それは、GMを論の主題として取りあげようとする際に想定し得る、

二方向からの取り組みをしめすことによって明らかになる^③。すなわちGMを、「創世記」註解として、もしくは対マニ教文書として論ずることである。実際、GMが、アウグスティヌスの後の著作活動にとって根本的に重要な二つの領域—聖書解釈と対異端の論考—を横断する著作であることは、著作のタイトルからもその論述からも自明である。ところで、これらの領域では次のような事態が認められる。先ずこの二領域の前者、この場合は「創世記」首章の解釈を、アウグスティヌスは生涯を通じて五回にわたって試みた。そして、その営為の結果として『創世記逐語註解』を著した。^④一方後者、この場合はマニ教反駁の領域において、マニ教の聖書理解にとどまらずその教説を批判する著作が、GM成立とはば踵を接して数多く公刊されていた。それ故GMは、これら二領域におけるアウグスティヌスの思索のごく限られた部分を構成するに過ぎない。そして、これらの領域におけるアウグスティヌスの思索の内的な展開と成熟を読みとることに注視するならば、GMに集中し、展開されている議論の意義を認めることは難しいだろう。そこで先ず、GM理解の手掛かりを発見するために、この註解書に外在する証言を検討してみたい。

さて、この註解書がアウグスティヌスのアフリカ帰還後三八八・八九年頃に著されたことは、『再考録』の記事 (*vetr. I, x, 1c*) に明らかである。また、アウグスティヌスは三九一年にヒッポで司祭に叙階され、その後に『未完の創世記逐語註解』に取りくんだ。したがって、GMをアウグスティヌス最初期の、司祭に叙階される以前唯一の聖書註解であると規定し得る。また、マニ教の聖書理解の反駁を企図したこともその記事から明らかである。そこで、未だ教会の導き手でなかった者の所産たるGMがその読者に何よりもマニ教徒を設定していたと見なすことができる。それでは、マニ教徒のみを読者であると断言することは可能だろうか。GMの読者としていかなる類の人々が考慮されていたのか、という疑問が提出されよう。

GM成立を回想し、その聖書解釈の方法に言及するテキストを『創世記逐語註解』第八巻のうちに見出し得る。

また私自身回心して間もない頃、マニ教徒を論駁して二巻の書物を著した。この人々は旧約のそれらの書物をそうすべきであるのとは違った仕方では解釈することによって誤ったというのではなく、そもそもまったく

受けいれず唾棄してこれらの書を冒おしている。私はすぐさま彼らの戯言を論破し、また彼らが憎む書のうちに、キリスト教的、福音的信仰を探究する心持ちを呼びさまそうと望んだ。そして当時すべてを固有の事実として解し得るとは思わず、むしろそれは不可能、或いはほとんど不可能、或いはまったく困難であると思われたので、この書物を仕上げるのを遅らせることのないように、字義通りの解釈が見出し得なかつた箇所が比喩的に何を意味しているのか、できる限り簡潔、明瞭に註解した。簡潔、明瞭を心掛けたのは、多くの書を読み、議論の曖昧さに嫌気している人々がそれを手に取る気にもなれないことのためである。しかし当時私が何を欲し、しかもできなかったかをいまもよく覚えてゐる。つまり最初は象徴的ではなく、全てを固有の事実として理解するようにということである。(Gn. lit. VIII, ii, 5)

この記述からGMがマニ教徒を「創世記」解釈へと向ける目的をもって著されたことが明瞭である。そこで先ずマニ教徒をその読者として挙げるができる。だがさらに、

煩瑣な議論に辟易した人々が註解を忌避しないために、簡潔に説明を試みたとも言われている。その彼らは多くの註解を読んだと報告されているかぎり、マニ教徒であると思しえない。そもそもマニ教徒は旧約聖書を排斥した故に、その註解を積極的に読もうとはしないだろうから。それではその彼らとはいかなる類いの人々なのか。このテキストからも読者についての疑念が生じる。加えて、「創世記」の章節をすべて等しく「固有の事実」として解釈することを欲しつつも、その不可能故に別の方法を採用したという記述は、比喩的解釈の方法が代替品であつたにすぎないのか、という解釈法に関する疑問をもたらすだろう。

GMに外在するこれらの証言から明らかに問題性は次のごとくである。それは先ず、GMの読者としていかなる類いの人が考慮されていたのか、という疑問である。その読者はマニ教徒にかぎられるのか。或いは、その他の人々も著者によって設定されていたのか。また、その読者に向かつて採用された「創世記」を比喩的に解釈する方法が本来採られるべき字義的な解釈法の代替品に過ぎなかつたのかという疑問も生ずる。比喩的な解釈法は「創世記」理解に関わる曖昧さをもたらすのではないか。そもそもその解

釈法はいかなる意味を有するのか。これら二つの疑問のうち、先ずは後者の聖書解釈の方法についての疑問を手掛かりにGM内部の考察に取りかかりたい。

第二節 聖書解釈の方法

このGMは、幾度となく「比喩的な」と形容しうる解釈法に言及する⁽⁵⁾。先ず、第二巻冒頭で「創世記」テキスト(一・四b―三・二四)が一括して挙げられた箇所につづく論述に着目してみたい。

アウグスティヌスは、引用されたテキストをはじめに「歴史に即して」、次に「予言に即して」論ずるよう提案する。為されたことは歴史的に語られ、将来のことは予言的に告知されるからである(GM II, ii, 3, 2-11)。語られたすべての事柄を「文字に即して」理解しようと欲し、信仰と一致する仕方すべてを宣べ伝え得る人は「まったくすぐれて賞讃されるべき理解者」(14-16)である。一方、信仰と一致する仕方、不敬虔にはなくテキストについて語ることができないならば、「文字に即して」理解しようという試みを断念しなければならない。

書かれている事柄が敬虔に神にふさわしく理解されるためには、それらのことが比喩的に、また謎において示されていると信ずるより他には、いかなる手立ても授けられていない。(II, ii, 3, 16-18)

このような方策を採るに際しては、旧約聖書における多くの謎を解明した使徒の權威があると言われる(16-20)。したがって、「創世記」はすべて、神についてふさわしく理解しつつ「文字に即して」解釈され得る章節から構成されているとアウグスティヌスが諒解していたことが明らかである。しかし、書かれている事柄を「文字に即して」つまり字義的に解釈しても、不敬虔な仕方ではか捉えられないと判断するとき、比喩的な解釈法を採らざるを得ない。比喩的な方法を選択する事態は、解釈の隘路において生ずるのである。それでは、その解釈法は、字義的な方法の代替であるにとどまるのか。

アウグスティヌスはその選択の意義について同じ第二巻劈頭で次のように語る。

これらの叙述はすべて、明白にはなく比喩的に (non aperte, sed figurate) 表わされている。それは真理を探究する者の精神をきたえて、肉的なつとめ (negotium) から霊的なつとめへ呼びだすためにである。 (II, i, 1, 7-9)

比喩的なテキストがその読み手の精神を鍛練することによって、その者は「霊的なつとめ」を果たすにふさわしいものとなる。この「つとめ」についてはさらに説明が加えられていない。とはいえ、いわば肉的な状態から霊的な状態への移行、展開については、その直前の第一巻末において、「善いはたらきと正しい生活」(I, xxv, 48, 19) のなかで生の完成へ向かう階段が辨別される。したがって、この「つとめ」とは生の完成へ向かう途上で遂行されるその者の諸活動を指示し、そのうちに比喩的なテキストを解釈する営為が数えられると見なすことはできよう。⁽⁶⁾ それでは一体、比喩的なテキストがそれを読み解こうとする者を変えらるゝとはいかなる事態なのか。ところで「比喩的な」という形容は言語の表現法に関わる。比喩とは事柄を分かりやすく、また印象的に伝達するために、適宜例をしめし相応し

い形容を使用する修辭学上の技巧である。それ故、ある事柄を比喩を用いずに表現することも、用いて表現することも可能である。一方その表現を受けとる者は、比喩的な表現の技巧に感嘆するとともに、その表現が指示する事柄を解釈するプロセスを介して、事柄自体を直截に示されたときよりも、事柄を発見する経験を通して発見した事柄をいっそう強く精神に刻みこむ。しかし、その感嘆や発見のよるこびによって読む者の精神は変わるのか。確かに、古代末期の煩瑣を極めた技法に習熟するには一定の時間が必要であり、その過程における習練によって精神が鍛練されることはあり得るだろう。だがさらに、その者の「生」が変容するという事態は想像しがたい。⁽⁷⁾

すでにアウグスティヌスは、旧約聖書の章句を「文字通りに解した」(conf. V, xiv, 24) ことによって、その書物がマニ教徒たちに対して辯明することが困難であると見なしていたときにも、修辭学の教師として「比喩的な」解釈法に通暁していた。それにもかかわらず、そうした方法は自己の躓きを乗り越える助けとなりえなかった。したがって、ここで「生」を変えざるほどの権能を有するという解釈法は、単に「比喩的な」と形容されるにとどまらないと考

えられる。実際、アウグスティヌスが、アンブロシウスから受容した解釈の方法について、文字通りに採れば神についてふさわしく理解されないように見える箇所について「霊的な意味を開示した」(VI, iv, 6)と報告するのに照応するかのように、GMのなかでも、解釈の「霊的な」位相に言及する。マニ教徒は人間の像に作られたと語る「創世記」の章句(一・二六)について、神にも四肢がそなわっていて人間と同じ姿かたちをとるという「神人同形論 (anthropomorphism)」を認めて非難する。アウグスティヌスはその論難に対峙し、マニ教徒の主張をしりぞける。

聖書を霊的に理解する (spiritaliter scripturas intellegunt) すべての人は、それらの名「神の眼、口、耳、足」によって身体的な肢体ではなく、霊的な力を理解することを学んだのである。

(GM I, xvii, 27, 28-22)

また彼らが非難する別の章句についても、「肉的に、或いは霊的に解釈されるべきか」(I, xix, 30, 67)と問いを発

して、「霊的な」解釈によってテキストを理解すべしと勧告するのである。

さて、聖書を解釈する営為においては、さまざまな段階でそうである、或いはそうでないという判定をくだす。そして、何らかの読み方を選択し、その章句に語られている事柄を明らかにしようと試みる。テキスト解釈が包括的に言語に関わる活動だからである。こうした一連の作業を踏まえて、たとえば「創世記」についての理解が成立する段階に達するときは、そのテキストの有する価値的な次元との連関が生じてくると考えられる。というのも、この書物が聖書記者のことばによって記されているかぎり、解釈作業を経て攫まれてくるのは、そのことばを記した記者の指示するもの、つまりその章句の意味である。けれども、その意味と全く分離されるわけではないにせよ、それに還元することのできない次元があるだろう。それはテキストが神についてふさわしく敬虔に語られているという聖書把握の次元である。そして、上述のように「文字に即して」解釈することに躓き、比喩的な解釈の道を辿る者であっても、その解釈作業においてはこの価値的な次元に達する。そこで、この次元で成立する解釈を指示するに際して、アウ

グスティヌスは単に「比喩的な」と章句の意味の次元に関わる形容よりは、神との交わりが必然である「靈的な」という形容がふさわしいと考えたのではないか。というのも、神について敬虔な仕方でも語ることが勝義に問われるテクスト「創世記」(一・二六)にいたったときに、アウグスティヌスは、神についてふさわしく解釈すべき様相をしめして「靈的な」という規定を提出したからである。⁽⁹⁾この規定は、字義的、或いは比喩的という対比で捉えられる解釈法を本来あるべき様相のもとに包括する。その様相にあずかるかぎりで、「比喩的な」解釈は字義的な解釈の代替と見なすべきでない。それでは、そのような様相にあずかる者がいかに自己の「生」を変容し得るのか。その疑問を検討するために、ついでそのような解釈法を採るべきと促される読者に着目してみたい。⁽¹⁰⁾

第三節 「靈的な」解釈を促される読者

GMの読者として設定されるのは、既述のようにマニ教徒であるとともに、その彼らが欺こうと試みる人々である。というのも、アウグスティヌスは著作の冒頭で「マニ教徒

が人々を選びだして欺くならば、我々もまたことばを選ぶことによって彼らに答えることにしよう」(I, i, 12)と宣べる。マニ教徒の旧約聖書への非難に反論しえない人々が取りこまれようとするのに対抗して、その人々に理解し得る仕方でも註解を著すという意図を明示するのである。

「ことばを選ぶことによって」という句は、アウグスティヌスが人々を「学のある人 (docti) (I, i, 1, 2)」と「学のない人 (indocti) (I, i, 1, 3)」と分けたうえで、或るキリスト教徒たちの助言に従って、マニ教徒に答えるすべをもたない後者の人々に諒解可能な仕方、「彼らと共通の語り方」(I, i, 1, 10)を採った故に附言したと解されよう。

さらに、マニ教徒が欺くのが常である人々は「弱く小さな人々 (infirmi et parvuli) (I, i, 2, 2)」と呼ばかえられ、「小さな人々 (parvuli)」と一貫して指示される。⁽¹¹⁾

この「小さな人々」に関わるテクスト群を追跡してみよう。先ず上述のように「小さな人々」は、旧約聖書を非難するマニ教徒に答えるすべを見出せない人々である。彼らは創造の秩序に関わる聖書テクストを理解することができず (I, iii, 5)、その弱さのために「眼に見えないもの」(I, v, 9, 12)を捉えることができない。さらに「キリストに

おいて小さな人 (parvulus in Christo) であり、「肉的人人 (carnalis)」である限りで、「霊的な人 (spiritualis)」と対比される (I, xxiii, 40, 40-42)。ところでこの対比は「コリント前書」(三・一—二)を下敷きにする。⁽¹²⁾ というのも、「肉に属する者」、つまり「キリストにある幼な子」と「霊的な人」が対比されるとともに、霊的な人には堅い食物が、幼な子にはまだ食べる力がないので乳が与えられると言われるからである。その章句に支えられ、この箇所でも「食べ物」のイマージュが現われる。霊的な人は「聖書の食べ物と神の法を食する」(I, xxiii, 40, 34-35) けれども、「小さな人々」は「食べ物」を持つているだけである。テキストを象徴するこの「食べ物」を食する霊的な人は、多くの事柄を理解できる。そして、その理解の根幹には「眼に見えないもの」がある。⁽¹³⁾ というのも、既述のように聖書の「あるべき」、つまり霊的な解釈はすぐれて神と魂についての非物体的な理解によって支えられる。したがって、「霊的な人」と対比される「小さな人々」とは、神と魂についての物的な理解をしりぞけることができず、先ず信することにあずかる人々である。

このパウロ的な定式は、初期著作『秩序について』に明

示される対比の定式《sapientes · stulti》からの展開であると思ふことができる。⁽¹⁴⁾ この定式においては、《stulti》が《sapientes》になり得る回路が、後者からの学知の教示を契機として、《stulti》自身の内なる知を現実化する事によって開かれる。しかし、探究する自己への還帰が成就されない限りは、《sapientes》になり得る「生において」の進展は期待のままにとどまらざるをえない。このような困難を内包する定式に比して、一方GMのそれは、幼子が大人へと乳と食べ物によって成長するという普遍的なイマージュによって支えられている。それ故、未だ聖書解釈というつとめに従事していない人々に対する勧めとていっそう啓発的である。⁽¹⁵⁾ そして、非物体的な神と魂についての理解の困難にもかかわらず、「しかし、すべての人はその同じ食べ物を持っている」(I, xxiii, 40, 43-44) と附言することで、その勧めは強調される。このイマージュは、そのような意義を内包すると考えられる。さらに、マニ教徒が「もしもこうしたことばの秘儀を非難したり批判せず、尋ね求め敬意を払いながら探究するならば」(II, 1: 9, 13)、このような「小さな人々」に含まれ得ると言われていることは、この定式が全ての人にとって啓発的で

あることを示唆するだろう。

さて、アウグスティヌスはマニ教徒へ向けて「マタイ福音書」の章句「求める者には与えられ、問う者は見出し、叩く者には開かれる」(七・七)も援用する。そして、その同じ聖書テキストを提出する第一巻の冒頭部でも聖書解釈への勧めを呈示する。そこでは解釈のつとめに従事する者について、

もしも根気よく彼らが探索するならば、そこから彼ら
がはなれ彷徨ったそのもの泉へと、おおいなる労苦
に疲れ果て、かわき、死に瀕しながら戻る。

(I, i, 2, 21-23)

というイマージュが示される。そこで次に、このイマージュに関わるテキストを取りあげて、聖書解釈に取りくむ「小さな人々」についてさらに検討を続けてみたい。

「創世記」(二・五一-六)についてアウグスティヌスは、
比喩的な形象を充溢させつつ解釈を展開する。¹⁶魂は、罪を
おかしたのちに地上で労苦しはじめ、雲を必要としはじめ
る(II, iv, 5)。「主なる神が地に雨を降らせず、また土を

耕す人もなかった」(Gen. 2, 5)けれども、享受していた
幸福な生から追い払われ、地上ではたらきはじめると雨を
もたらす雲を求めたからである。

神は魂を雲から、即ち預言者と使徒の書から潤す。と
ころでそれらがまさしく雲と名づけられるのは、それ
らのことが響き空気をふるわせ通り過ぎた故に、比
喩の晦渋さが加わるといえば霧のように立ちこめて雲
のようになるからである。(II, iv, 5, 7-11)

この雲が「預言者と使徒の書」を象徴すると解することに
よって、地上での労苦が聖書解釈にたとえられる。それら
の書物のことが響く、つまり声にだして読まれるとき、
霧がその密度をあげて雲になるのは、解釈の作業にとりく
むことによってはじめて、比喩的な表現の指示するものを
説明しなければならぬ困難が生じるからである。さらに
雲から雨がもたらされる自然現象にたとえて、雲から絞り
出されてくるものは、解釈作業によって得られた知見であ
ると言われる。「よく理解した者にはいわば真理の雨のよ
うに注がれる」(II, iv, 5, 11-12)。ところで、「地にはまだ

野の緑色のものはまだまったくなく、野のあらゆる食べ物もなかった」(Gen. 2, 5)。それらは人間の罪のまゝに作られた故に、「霊的な眼に見えない被造物」(II, iii, 4, 29)である。それらを作ったときには神は、その被造物の「知性に話し掛けながらそれらを内なる泉によって潤していた」(II, iv, 5, 20-21)。一方、罪をおかした後は雲から雨を受け取るように「外的なことば」(2c)を解釈する必要が生じた。この罪は神からの背反であり傲慢によってはじまる(II, v, 6, 4-5)。そのとき「内なる泉」によって潤されることはなくなる。したがって、地において労苦する者は、雲からの雨、つまり「人のことばからの教え」(II, 12)を必要とする。

これらの雲からよるこんで真理の雨を受けることができればよいのだが。實際地の乾きの故に、我々の主は我々の雲という肉を受けることを決めて、聖なる福音という雨をしとどに注いだのである。

(II, v, 6, 13-16)

地上で労苦する者はその雲のなかに「食べ物」(2a)を探し

求める、つまり、聖書解釈によって自らの精神を養う糧を得ようとするのである。

さて、一貫して現われる「雲」のイメージを、アウグスティヌスはただちに「預言者と使徒の書」と換言した。この「雲」について、例えば『詩篇講解』では次のように説明されている。

雲とは何であるか。それは神のことばの宣教師である。……まことに兄弟たちよ、雲とは真理のことばの宣教師である。神の宣教師を通して驚くときには雲を通して雷鳴が響く。神の宣教師を通して奇跡が起こるときには雲を通してふるえ、雲を通して驚かせ、雨を通して注ぐ。(en. Ps. XXXV, viii)

ここでは雲が、神のことばを人々に伝える宣教師にたとえられている¹⁷⁾。だがこのイメージ自体を再考するならば、雲は天空のもとにあって通り過ぎるけれども、天空は通り過ぎない。そして神のことばを伝える宣教師のことばもまた、空気を震わせつつ通り過ぎる。したがって、雲が「預言者と使徒の書」をあらわすとともに、神の教えを謎のう

ちにあらわした聖書記者のことばであると解することもできよう。そして、そこから神の教えを絞り出すことが求められる。聖書解釈という営為が原罪後の人にとっては、先ず比喩的な表現との格闘にあることをこれらのイマージュがよく示しているのである。

ところで人間の原罪についてアウグスティヌスは、「人間の傲慢のはじまりは神から背くことである」と「集會書」(一〇・一四)を引用したうえで、神から背くことによって内的な泉によって潤されることがなくなつたと述べる。原罪ののちに人は忍耐強く「労苦すること」、つまり聖書解釈にとめなければならぬ。神のことばに内的に、「面をあわせて」(I Cor. 13, 9)向かうこと、直視することができなくなつたからである。それでは、「樂園で享受していた幸福な生」(GM II, v, 6, 26-27)にかわつて、神のことばを外的に解釈するつとめはただ苦しみつゝ遂行されるのか。その樂園という名によって意味されるのが幸福な生である。「幸福の生を含んでいる靈的なよろこび」(II, ix, 12, 6)と峻別される限り、つとめはただ苦しみのものにあるだろう。それにもかかわらずアウグスティヌスは、「これらの雲からよるこんで真理の雨を受けることができ

ればよいのだが」(II, ix)と願望する。そして、その願望は「我々の主は我々の雲という肉を受けること」、つまり受肉を契機として「真理の雨」が注がれていることの諒解によって支えられる。解釈という労苦の原動力は、キリストの受肉が解釈者に対して真理をもたらしことを理解することにある。「キリストにおいて小さな人」はふたたび野の緑色になる、即ち靈的な「眼に見えない被造物」(II, xi, 1, 45)を見るだろう。したがつて、こうした解釈への勧めは、マニ教徒の欺きと脅威にさらされている「小さな人々」に対して、アウグスティヌスから呈示されたいわば贈り物であると言えよう。労苦する人に対して、その生の実りを「約束する」(II, v, 6, 16)キリストの受肉の意義が保定されるからである。アウグスティヌスは魂について明らかにされた事柄をまとめて、次のように語る。

魂の態勢のこれほどの変容によって、つまり悲惨になつて転落することによって、またふたたび幸福さへと戻るまでの回復によって、魂が時間を通して変えられ得ることが確信される。(II, vi, 7, 10-12)

それでは労苦する人はいかにして生の実りへ向かうのか。この疑問を検討するために、GM第一巻末尾における生の階梯についての論述を考察してみたい。

第四節 靈的な階梯における聖書解釈

第一巻第三五―四一節においてアウグスティヌスは、創造の最初の六日間を世界の六つの時代に対応させる⁽¹⁸⁾。さらにその六日間をひとりの人間に対応させることによって、信仰に基づく靈的な生を象徴する比喩として解釈する。つまり六つの時代が世代のうえで異なっている理由が人間の成長に託して説明される。また、辨別された階梯は順に進展し、その終端が享受されるべき安息によって区切られる。そのような到達されるべき享受ゆえに、途上でなされる事柄は「善いはたらきと正しい生」(I, xxv, 43, 12)と言われる。このような記述は、先行著作『魂の大いさについて』につづいて、魂が神へ向かって七つの「階梯 (gradus)」を踏んで上昇するという論のうちに数えられる。だが、『魂の大いさについて』の論は、聖書註解書を未だ著していないアウグスティヌスの境位に照応するように、解釈作

業への限定的な促しを示すにとどまった。それではGMにおける階梯論はその境位に照応して、聖書解釈を組みこんでいるのだろうか。第一日目の記述から順次考えていき⁽²⁰⁾たい。

第一日目、「眼に見えるものによって信ずる」(I, xxv, 43, 3)とき信仰の光を持つ。端緒において可視的なものによる信が明示されるのは、マニ教徒のように可視的なもののみ依拠して世界を把握することを意味するのではない。むしろ被造世界によって信がはじまるのは、その被造世界との応答を介して創造者が知られるべきであるという促しを受けとるためである⁽²¹⁾。この信は「主が眼に見える仕方で見られることをよしとした」(45) 故に、主によって立てられた。それに敬虔にあずかることは「小さな人々」にふさわしい営為である。

第二日目には、「肉的なものと靈的なものとを識別する教えの大空 (firmamentum disciplinae) (56) を持つ。「大空」としての「教え」とは何か。この段階で「教え」はいわば賜物として授けられた。しかし、それが正しく受けとられているかは明白でない⁽²²⁾。授けられていることがただちにそれを正しく諒解したことを含意するわけではない。

また、それは例えば「カトリックの教え」(I, p. 2, 20)のように信に直接連関するの。確かにすでに述べたように、「大空」という比喩的な表象はそのもとに過ぎざる雲を生みだすが、自らは去りゆかないという意味において、聖書テキストの礎である神の教えに当たるとも思われる。この点については第四日目まで検討を進めてから再考してみたい。

第三日目には、「善きわざの実りを収穫する、自らの精神を腐敗と肉的な試練の波に洗われることから隔てる」(I, xxv, 43, 79)。¹⁾こゝでは「ロマ書」(七・二五)「私自身は、精神においては神の律法に仕えているが、肉においては罪の法則に仕えている」が引用され、自己の分裂を示唆している故に翻って、「善きわざ」への取りくみに着手していると解される。というのも、神の律法はそれを聴くだけではなく、実践することが求められる。しかし、それに仕えるに容易でないからである。さらに、第四日目には、「もはや、あの教えの大空において霊的な理解に取りくみ識別して、何が不変的な真理であるかを見ている」(I, xxv, 43, 11-13)。²⁾この段階にいたって「霊的な理解」に従事しているゆえに、先行する第三日目にその理解に着手したと

解される。動物とは異なる所以である「魂の理性的な能力が人の霊である」と聖書に記されている(II, viii, 11, 16-18)のだから、「霊的な知性」を行使することによって魂は真理にあずかることができる(I, xxv, 43, 14-16)。³⁾そして、その霊的な理解への取りくみは大空のような「教え」において遂行されるのである。

さて、「教え」とは、空にはり巡らされて過ぎさらぬものとして、神の教えそれ自体を指示するのではないかと想定した。そこで着目されるのは、その霊的な理解を作り出すことについて語るテキストである。

一体何がいわば太陽のように魂において輝く不変な真理であるか、いかなる仕方で魂がその真理にあずかる者となって、いわば月が夜を照らすようにその魂が身体に秩序と美しさを授けるのか、いかなる仕方ですべての星、即ち霊的な理解がこの生の暗さにおいていわば夜に光り輝くのかについて、分かるのである。

(I, xxv, 43, 12-17)

「霊的な理解」に取りくむことによって、魂を照らす真理、

神と身体を支配する魂についての本来的な認識が獲得される。そこで「生」の歩みを導くという「靈的な理解」の意義が明らかになる。このような神と魂についての認識に支えられる限り、その理解は既に規定したような聖書解釈の「あるべき」様相を指示するからである。したがって、その「教え」は本来的な仕方で攫まれる聖書のことばを指示すると解してよいだろう。神についてふさわしく語る「あるべき」解釈が第三日目に着手されているのである。⁽²³⁾

第五日目には、靈的な理解への取りくみによって得られたものがいっそう強固になると共に、この世のさまざまな行動を通して「兄弟たちの交わりの有益さのために」(I, xxv, 43, 20) はたらきはじめる。そして、この交わりから、魂に役だつはたらき、この世の流れを打ち砕く力強い行動、また天のことを告知する声を生みはじめる(20:25)。ここに隣人への配慮がこの階梯に組みこまれていることが明らかである。一方生みだされる各々のものが何を指示するかについては曖昧である。ところで、この第五日目の簡素な記述において「生」の活動を言表する《actio》が繰り返される一方で、第六日目の記述においては知性的な活動に関わる語彙が頻出する。その第六日目とは、靈的な結実、

つまり善き「思考」を有する精神の安定によって、「生きている魂」が生み出され、その魂のすべての運動が支配される階梯である(25:26)。理性と正義に仕えることによって、「人間は神の像と似像に、男と女、即ち知性と行為になった」(Gen 1)。したがって、次のように捉えることができよう。先ず第五日目に靈的な仕方で生きる人、つまり教会のなかで信仰によって生きる人が生まれ、隣人への配慮が成立する。さらに、そうした人々が神と類似である故に靈的な存在と言われるにふさわしくなる第六日目で、その生の「活動」と知性が結合し、靈的なものが充溢する。また、これまでの諸階梯を秩序づけて、「既に人間の完成において語られた他のことは下に置かれるべきである」(23:34)。したがって、「人間の完成」、幸福な生活にいたる道行が固められる。最後に、第七日目において永遠の休息が望まれる。この休息は神によって与えられる(40:4)。

こうした生の階梯についての比喩的であり、また駆使されるチームからすぐれて哲学的といつてよい論は、「人間の完成」への諸段階と変容を明示している。このような論が展開されるのは、魂が時間的な継起とともに幸福な生へと大きく変容し得るといふ信(II, vi, 7, 10-12)に依拠す

るからであり、キリストによって「ふたたび作られ、生かされ、樂園へと戻される」(II, vii, 10, 24)という希望が抱かれているからである。さて、「靈的な理解」がこの諸階段のなかに組みこまれ、また第三日目における聖書解釈への取りくみが聖書のあるべき仕方での解釈する営為を指示することは上述の通りである。さらに着目されるのは、第三日目の記述のなかに「ロマ書」が引かれていることである。「靈的な理解」に取りくみは始める、つまり敬虔に聖書のことばを攫もうとするならば、「神の律法に仕える」ことが求められる。そのような解釈者の「生」の選択の意義は、次のようなテキストによっていっそう明らかになる。

使徒が「律法の充溢は愛である」(Rom. 13, 10)と語ることに注意が向けられ、この同じ愛があの一対の戒めに、「あなたはあなたの主なる神を、心をつくして、魂をつくして、精神をつくして愛しなさい」(Math. 22, 37)、また「あなたの隣人をあなたと同じように愛しなさい。この二つの戒めのなかに律法全体と預言者たちがかかっている」(Math. 22, 39-40)に含まれていることを我々は見てみる。(II, xxiii, 36, 6-11)

神の律法に仕えることによって、聖書のすべての章句がこの二つの愛の戒めに凝縮されていることを見出すとき、聖書を神にふさわしく解釈する営為は、この二つの戒めを聖書のなから剔出するつとめとして捉えられよう。この二つの戒めを解釈上の判別の基準として立て、それに合致するか否かに従って解釈することが求められる。そのように靈的な位相にあずかることが、この第三日目にはじまる。とはいえ、二つの戒めを見出す者は、その戒めと自己の生とを比較することによって、自己のあり方を省みるだろう。そして、いかにこの戒めをいまだ守るほどの者になつていないかを見出すだろう。靈的な理解に取りくむ者は自己の境位が神にふさわしくないことを知って嘆くのである。聖書解釈が勝義に魂の修練にあずかる営為として捉えられるのは、この自己諒解においてである。

これらの叙述はすべて、明白にはなく比喩的に表わされている。それは真理を探究する者の精神をきたえて、肉のなつとめから靈的なつとめへ呼びだすためにもである。(II, i, 1, 7-9)

結語

「創世記」を拒絶するマニ教への応答において、神と魂の非物的な理解にそくして聖書のことばを開示するようにと逼られるアウグスティヌスは、一対の愛の戒めに収束するテキストとして聖書を解釈する「霊的な理解」の真相を明らかにする。言語の意味作用に支えられる比喩的な解釈法もまた、テキストの価値的な次元に逢着するからには、本来あるべき解釈の様相のもとに定位される。したがって、GMにおいて採られた比喩的な解釈法は、字義的な解釈法の単なる代替ではない。このような解釈法を勧められる者は「小さな人々」という規定のもとに包括される。これは、読者として仮設されたマニ教徒であれマニ教徒の欺きにならされる人々であれ全てを指示する。というのも、聖書を解釈する営為は原罪ののちの人間全てに課せられたつとめだからである。さらに、このつとめを担う者は、神へと向かう生の階梯の途上にあると言われうる。その諸階梯のなかに聖書解釈という営為が組みこまれていくからである。その営為の原動力であるキリストの受肉への信は、真理の

証示を約束することによって、労苦する人々に対して生の実りをもたらす。したがって、自己の諒解と変容をもたらす聖書テキストの「霊的な理解」は、すぐれて「生」における修煉として攫まれるのである。²⁴⁾

註

- (1) GMのテキストは、*Sancti Augustini Opera. De Genesi contra Manichaeos*, ed. D. Weber, CSEL 91 (Wien 1998) を使用した(引用箇所を指示するために、巻、章、節、行数の四種類の数字をあげる)。近代語訳として専ら参照したのは、*Saint Augustine, On Genesis*, trans. R. J. Teske, *Fathers of the Church*, v. 84 (Washington D.C. 1991); *On Genesis*, trans. E. Hill, *The Works of Saint Augustine. A Translation for the 21st Century*, v. 1/13 (New York 2002)である。GM以外のアウグスティヌスの著作の略記については、*Augustinus-Lexikon*, vol. 1 (Basel 1986-94) に従う。

- (2) GMへの関心が、後述のような二領域における制約にもかかわらず高まったのは近年のことである。すなわち、この註解書における魂論に着目した R. O'Connell ("The De Genesi contra Manichaeos and the Origin of the Soul", *Revue des études augustiniennes* 39 (1993), pp. 129-141) や、英

訳を公刊するとともに一連の論を提出した R. Teske (その諸論については、この小論の註を順次参照されたい)。また、初期「創世記」註解の論文集に寄稿した J. Ries や、とりわけ GM のテクニスト校訂に取り組み著作研究の土台を固めた D. Weber (cf. "Adam, Eva und die Schlange: Überlegungen zu Augustinus Interpretation des Sündenfalls in De Genesi contra Manichaeos", *Leica cristiana nei secoli III e IV* (Roma 1996), pp. 401-412; "Communis loquendi consuetudo: Zur Struktur von Augustinus De Genesi contra Manichaeos", *Studia Patristica*, vol. 33/16 (1997), pp. 274-279; "Textprobleme in Augustinus, De Genesi contra Manichaeos", *Wiener Studien* 111 (1998), pp. 211-230; "Augustinus, De Genesi contra Manichaeos. Zu Augustinus Darstellung und Widerlegung der manichäischen Kritik am biblischen Schöpfungsbericht", *Augustine and Manichaeism in the Latin West* (Leiden 2001), pp. 298-306) の取組を挙げてみる。

(3) この二方向からの取り組みを想定するにからん先立って問われるべきは、この註解書を一体として読むことを可能にする視点である。筆者は、アウグスティヌスの証言にもかかわらず、それぞれを「一つの全体」として読みがたらしい『秩序について』や『自由意志論』に取組むべきではない。「一つの全体」として読むことの困難に直面してきた。このような困難を明瞭に見つめる岡部由紀子「真理観の転回—アウグス

ティヌス懐疑論批判の射程—』『パトリスティカ』教父研究会、第七号(二〇〇三)は、GM を一定の構想のもとに読もうとすることを筆者の道標となった。岡部の提出した「アカデミア派論駁」研究ほどに、GM を「一つの全体」として提出したアウグスティヌスの問題の地平は、筆者のまえには未だ開かれていない。その限りでは、この小論は「研究駁論」の前提であるに過ぎない。とはいえず、筆者の GM 読解は、聖書解釈による生の修練をカテケーシスのもとに確保しようとしたアウグスティヌスの営為を予見している。その予見が妥当であるならば、司祭に叙階される以前のアウグスティヌスが古代的な「exercitatio animi」をキリスト教的に形成しようとする習作が GM であるを規定し得るだろう。

(4) 「創世記」註解とその成立順に挙げるならば、1. GM (388/389) - 2. *De Genesi ad litteram imperfectus liber* (393) - 3. *Confessiones*, lib. XI-XIII (397-400) - 4. *De Genesi ad litteram* (401-416) - 5. *De civitate dei*, lib. XI sqq. (413) である。その種別については、M.-A. Vannier, «Creatio», *«Conversio», «Formatio» chez s. Augustin* (Fribourg 1991), pp. 83-94 を参照されたい。

(5) この解釈法に基づいてアウグスティヌスは専ら「figura」とその副詞形「figurata」の二つの言葉である。その他に「callegoria」(eg. I, xxii, 33, 18), «aenigma」(eg. II, ii, 3, 17), «imago」(eg. I, xvii, 28 *passim*), «similitudo」(eg. I, xiv, 20, 29), «mysterium」(eg. I, iii, 5, 15), «sacramentum」(eg.

- I, xxii, 33, 15), 《signum》(e.g. I, viii, 14, 13), 《velamen》(e.g. I, xxii, 33, 16) による語彙を用いる。この表現法の古典修辭学における表現については H. Lausberg, *Handbook of Literary Rhetoric* (Leiden 1968): 88 600-910 (Figurae) の委曲を尽くした分類に於て述べた。アウグスティヌスが自己の閱歴から獲得した知識を適用していることに疑いがないにせよ、*doctr. chr.* III, v, 9-xxiv, 41 における比喩的な表現法についての綿密な分析に相当する場合は、GM に認められない。むしろ、この小論で検討するようになされる表現法を包括する相にその思考は集注する。その *doctr. chr.* にいたる思考の展開を追跡することによって、GM の諸用例の辨別が示唆されるであろう。しかし、その検討は本論の射程を越える。思うに、*doctr. chr.* III, xxx, 42 以降に詳細に検討されるドナティウス派の著述家ティコニウスの『規則の書』(三八二年頃)の影響を見つくり、それを分岐とするアウグスティヌスの解釈学上の展開を明示する必要がある。cf. P. Bright, "The Preponderating Influence of Augustine: A study of the Epitomes of the Book of Rules of the Donatist Tyconius", *Augustine and the Bible* (Notre Dame 1999), pp. 109-128.
- (6) このテキストについては、この小論の第四節において再考する。
- (7) 比喩的なテキストが解釈者に及ぼす影響に関して、アウグスティヌスの著作全体に見出される比喩の役割を探索した J. Pépin, "Saint Augustin et la fonction protreptique de l'allégorie", *Recherches Augustiniennes*, vol. I (1958), pp. 243-286 を示唆された。
- (8) このような解釈の様相に関して、岡部由紀子「*De doctrina christiana* に於ける signum と知解」『中世思想研究』中世哲学会、第二〇号(一九七八)六六一-七七頁から多くを学んだ。
- (9) アウグスティヌスの著作に於いて「*spiritualiter intellegere / spirituales intellegentia*」は GM のこの箇所が初出の用例である (cf. *Patrologia Latina Full-Text Database*)。[靈的な] 解釈の三つの用例 (全て中期著作) を検証する R. Teske, "Spiritual and Spiritual Interpretation in Augustine", *Augustinian Studies* 15 (1984), pp. 75-77 が、その用例の何れも神、或いは魂に於いての非物体的な理解を包含すると指摘することは、GM のこの箇所の解釈によく合致する。アウグスティヌスが初期からすでに一定の理解を獲得していた傍証になるであろう。「説教」における「spiritus / spiritualis」の用例を検証する W. A. Schumacher, *Spiritus and Spiritualis: A Study in the Sermons of Saint Augustine* (Mundelein 1957) は、靈的な解釈に於いて検討 (pp. 195-208) する。その形容の由来を同時代の修辭学の区分から借用したと主張する (p. 199)。
- (10) 発表に於いては、この箇所では、R. Teske, "Criteria for Figurative Interpretation in St. Augustine", *De*

Doctrina Christiana: A Classic of Western Culture (Notre Dame 1995), pp. 109-122 を紹介し、GM にける聖書解釈の規則から *doctr. chr.* III, x, 14 における解釈規則への持続が認められうるかを検討した。だが、Teske の論への評価が筆者において未だ固まっていらないこと、また紙幅の制限からこの箇所論を削除した。今後の課題としたい。

(11) Cf. R. Teske, *FacCh*, v. 84 (1991), p. 12, n. 27. 《docti-indocti》とどう組みで読者を言表するのかが、この冒頭の第一節のみである。

(12) アウグスティヌス初期著作における《parvuli》の初出例 (*quant. an.* xxxiii, 76) もまた「コリント前書」第三章二節を背景とする。その意義については、拙論「魂のはたらきとしての七階梯の上昇—アウグスティヌス『魂の大いさ』における魂論」『哲学誌』東京都立大学哲学会、第四十五号 (二〇〇三) 十五頁における「乳の有益性」に関する論を参照された。W. Schumacher, *Spiritus and Spiritualis* (1957), pp. 182-183 は、アウグスティヌスがその書を援用する場合、霊的な人になる回路が鎖されているのではなくむしろ、パウロが信仰において霊的になるようにと促す意図をしめすためにであると指摘する。その意図を象徴する「小さな人々」のイメージが初期から一貫するのは、「コリント前書」解釈がすでにその段階において固まっていることを証示するだろう。中期においてもこのパウロ的な語彙が一貫して用いられることば例を、cf. *conf.* XII, xxvii, 37; XIII, xviii, 23

に明らかである。また T. van Bavel, “L’humanité du Christ comme *lac parvulorum* et comme *via*” *Augustiniana* 7 (1957), p. 255, n. 41 以下、*I Cor.* 3, 1-2 以下、*I Cor.* 2, 6; *Hebr.* 5, 12-13 以下、またこのテーマに関わりを有するを指摘する。

(13) この《parvuli》と《fides》の差異に着目する T. van Bavel, “L’humanité du Christ comme *lac parvulorum* et comme *via*” (1957) は、《parvuli》が聖書の霊的な理解によって強められよう存在であると語るが、《parvuli》の「弱さ」を (*terreux au sens spéculatif*) (p. 257) に限定し、神と魂の非物體的な把握の欠如を考慮しない。この点については、《homo spiritualis》の卓越性を《their understanding of the faith》に比べ W. Schumacher, *Spiritus and Spiritualis* (1957), p. 185 以下、同じ難点を抱えていると見なされよう。

(14) 『秩序について』におけるこの定式の意味に関しては、拙論「自己知と「生におおって」の学知—アウグスティヌス『秩序について』研究総論」『中世哲学研究 VERITAS』京大中世哲学研究会、第二十一号 (二〇〇二) 二五頁以下を参照されたい。

(15) 最初期における《sapientes-stulti》の対比から、GM の定式への転回を指示し、その定式を《endarmement》とどう観点から特徴づけられる R. Teske, “A Decisive Admonition for St. Augustine?”, *Augustinian Studies* 19 (1988), p. 8

- 9, p. 92, n. 27 の指摘を示唆している。
- (16) この点の神学的な考察については M. Dulaey, "L'apprentissage de l'exégèse biblique par Augustin. Première partie" *Revue des études augustiniennes* 48 (2002), p.280 以下、トントロニヌスの *Expositio Evangelii secundum Lucam*, X, 42 における預言者が「霊的な恩恵とこそ露と似た雲である」とまた主は「マリヤから肉をまわしたときほど薄く雲となる」と言われる箇所からの着想を示唆する。
- (17) Cf. J. O'Donnell, *Augustine: Confessions* (Oxford 1992), vol. II, p. 113. O'Donnell は同じ経緯をキリストカスと云う *en Ps. LVI, xviii; LXXVI, xix; LXXXVIII, s. i, 7; CIII, s. i, 11* などの M のこの箇所を挙げている。
- (18) 創造のプロセスをこのように区分する思考が、アウグスティヌスに先行する教父におおむね見られる。パウロに依拠して展開した点については J. Ries, "La création, l'homme et l'histoire du salut" (1992), pp. 88-90 を参照されたい。また「世界を六つの時代と区切る計数的な思考の淵源」として A. Solignac, "La perfection du nombre six", *BA* 48 (1972), p. 633 は「ペロン *De officio mundi*, I, 47 を挙げている。
- (19) 『魂の大いさについて』におけるこの論に関して、拙論「魂のはたらきとしての七階梯の上昇」(二〇〇三)を参照された。
- (20) 以下の検討に関して C. van Lierde, "The Teaching of St. Augustine of the Gifts of the Holy Spirit from the Text of Isaiah 11: 2-3", *Collectanea Augustiniana* 3 (New York 1994), pp. 24-26 を参照しよう。
- (21) この点の創造世界の有する教示のはたらきについては、拙論「神讚美への促しと魂の完成の端緒—アウグスティヌス『自由意志論』における「意志」をめぐる」『中世思想研究』中世学会会報 第四十二号、二〇〇〇、六〇—六二ページを参照。ちなみに、この可視的事物への信の有する意義については *On Genesis*, trans. E. Hill, p. 67, n. 42 を参照。
- (22) この点については J. O'Donnell, *Augustine: Confessions*, vol. II, p. 84 の示唆を挙げよう。
- (23) アウグスティヌスの全著作のなかで「firmamentum disciplinae」という表現が用いられるのは、この行論の二箇所 (I, xxv, 43, 5; 11) のみである (cf. *Patrologia Latina Full-Text Database*)。この「disciplina」の指示対象については「firmamentum」と留意するならば、例として *conf. XIII, xv, 16* における「firmamentum libri tui」の「大いさ」が聖書と結合して使用される用例を認める。一方、J. O'Donnell, *Augustine: Confessions*, vol. II, pp. 269-278 は「disciplina」の意味については『秩序におおむね』における「学知」のプログラムの位相が「三九〇—三九一年に成立した『真の宗教』まで持続していたと指摘する (p. 277)」。GM における内実についてはさらに検討すべきだろう。
- (24) 最後に、この小論の土台となった発表において所見を提出

したにもかかわらず、筆者が十分に展開しえなかった課題を振り返っておきたい。その第一は、GM全体を一貫する視座についてである。その第二は、「創世記」註解の伝統におけるGMの位置づけについてである。前者については、読者論のさらなる検討も求められる。というのも、この時期のアウグスティヌスはタガステに友人たちとの修道的な共同探究の拠点を確立しようという意欲のもとに活動しはじめていた (cf. P. Brown, *Augustine of Hippo: A Biography* (Berkeley 2000), pp. 125-130; G. Lawless, *Augustine of Hippo and His Monastic Rule* (Oxford 1987), pp. 45-62)。したがって、そうした当時の状況を加味するならば、GMの読者として具体的にアウグスティヌス周辺の人々を想定することも可能になるだろう。さらに、読者に対して聖書解釈の生における意味を開示する霊的な上昇論がなゆえ、著作の結論部ではなく、第一巻の末尾に提出されているのか、という著作の一体性に関わる疑問も提出されよう。これらの疑問を検討することによって、古代的な修練としての解釈の営為を自らの周囲に集った人々とともに救済論的なカテゴリーシスへ展開すると思われるGMの思考の地平が明瞭になるだろう (この点については、未だ限定的であるが、*Augustinian Studies* v. 36, no. 2 (2005)に掲載予定の拙論“Augustine’s First Exegesis and the Divisions of Spiritual Life”において考察を加えた。参照されたい)。また、後者の課題は、創造の霊的な追体験としてヘクサメロンを聞くという伝統が

いかにGMへ浸透しているのか、という疑問に置換することができる。その疑問を検討することによって、オリゲネスを淵源に、アンブロシウスの影響下にあると思われるGMの固有性が明瞭になるう(オリゲネスの影響については、脱稿直前に筆者が入手した故に、この小論において検討できなかつたが、G. Heidl, *Origen’s Influence on the Young Augustine: A Chapter of the History of Origenism, in Eastern Christian Studies*, vol. III (Piscataway, NJ 2003) が、有益な示唆を与えるだろうと考える)。

この小論は、第一〇四回教父研究会(二〇〇三年六月)において発表した「聖書解釈と魂の上昇の階段―アウグスティヌス『マニ教徒に対する創世記註解』をめぐる―」にいくつかの補足をくわえた論考である。研究会の当日は、出席した方々がさまざまな観点から批判と意見を提出された。それらはこの小論のあとに掲載されている。発表者の理解の偏りが正されたならば、それは参加した方々の指摘によると思う。この場を借りてあらためて感謝したい。

いくらかの時間を経てこの小論を提出するにあたって、筆者は発表のために準備した原稿を部分的に補訂した。と

いうのも、この発表の後に、その内容についてさらに考察をすすめたからである。その進展の一つは、二〇〇四年七月に東京都立大学大学院に受理された学位論文の一章を構成する論である。その一章においては、聖書解釈の霊的な様相について検討した。もう一つは、二〇〇四年九月に聖心女子大学において開催された「環太平洋西岸教父学研究会」において発表した論である。その発表においては、著作の読者についての仮設を検討した。したがって、所収の「討論」とこの小論とのあいだに何らかの齟齬が認められるならば、その責は筆者に帰されるべきである。

《討論》

樋笠 勝士

第一巻の四十三節にある靈的な生の階梯についてだが、上村さんはこれを「小さき者たち」parvuli 向けの言葉と解している。この場合の parvuli とは、マニ教徒ももしかしたら含むかもしれない人々、すなわち「学識者たち」docti ではない人々であって、つまりこの著作は、一般向けとまでは言えないまでもそれほど専門家向けではないという意味のようである。しかし、この四十三節の言葉は果たして parvuli 向け、indocti 向けなのか。内容が難しすぎるのではないか。

上村 直樹

柴田 有

今日扱われたテキストは、『マニ教徒に対する創世記註解』第一巻の四十三節であり、ここに生の七つの上昇階梯がある。もう一つ、第二巻の五、六節を扱い、そこでは『創世記』第二章のテキストに則して、アウグスティヌスがアレゴリカルな解釈を展開している。このアレゴリカルな解釈が、生の七つの上昇階梯の中に位置づけられるのではないかというお話だと理解した。

■ 誰に向けた著作か

確かにそのようにも考えられる。はっきりしているのは、読者として一貫して parvuli が想定されているということと、もう一方の読者としてマニ教徒が語られていることである。アウグスティヌスが初めて聖書に向かった体験として、ホルテンシウス体験の後に、高揚した形で聖書に向かったのであるが、その時聖書の言葉は彼には稚拙に見えて、彼の周囲の人間も、彼が納得できるような解説をしてくれなかったということがある。それが、彼がマニ教に入っ

ていった一部の理由だというのは、『告白録』に書かれている通りだと思う。研究者たちは、その当時彼の周りにいた、信仰には篤いけれど *Indocui* な人々、これが *parvuli* であって、かつて自らをマニ教へと追いやった *parvuli* に向けて、*De Genesi contra Manichaeos* を書いていたのだと語っている。だから、*parvuli* と言った場合に、キリスト教の信仰を持っている人全体というように一般化するのではなくて、かなり限定した範囲での読者、彼と共同探求の中にいる者たちと言えるのではないか。そのような人々に指針を与えるのであり、彼らは、もし分からないのなら彼に聞くことができる人々として想定できるのではないか。しかし、確かにこの第一卷四十三節は分かり難いので、読み手として誰を設定しているのかについては再考の余地があると思う。一般向けであると同時に、かなり狭い読者を想定していると考えられるのではないか。

水落 健治

中期著作の『キリスト教の教え』*De doctrina christiana* と『主の山上の説教』のところで、やはり七つの階段が出てくる。かつて *De doctrina christiana* を研究していた

際に、その典拠は何かということを考えたことがある。私はこれを『マタイ福音書』の山上の説教冒頭に八つある「幸いなるかな」と関連付けた。アウグスティヌスは、この「幸いなるかな」の八つ目を、七段階の最初に戻し、言わば循環構造を考えている。更に、『イザヤ書』に、エツサイの木の上に降る霊が六つ挙げられているが、それが七十人訳では、一つのヘブライ語の単語が二つに分けて訳され、七つになっている。アウグスティヌスはこの訳を用いたと考えられる。この二つの箇所からアウグスティヌスは七つの階段を考案したのではないか、とかつて論文に書いた。今の上村さんの七つの階段の要約を聞いていて、中期のものより哲学的だと感じた。中期では、聖書の言葉に則して書かれているが、この対マニ教著作では用語そのものが哲学的だと思う。タガステに戻ってよいよ修道生活を始めようとしていたこの時期、アウグスティヌスは自由七学芸に関する著作を執筆していた。『再考録』でアウグスティヌスは、これらの自由七学芸に関するコメントリーを、自分とディスカッションをする人々と霊的に上昇してゆくことを目指して著した、と述べている。今日の上村さんの発表を聞いて、この時期にアウグスティヌスが置かれてい

た状況が大分見えてきた感じがする。アウグスティヌスは一方で自由七学芸を学び、上昇を志していたが、他方で *parvuli* と呼ばれる人々に囲まれ、聖書の解釈を介してそれを志していたのではないか。回心の前からプロティノスのなものを読んでいて、そういう中で一つの上昇のシエーマを持っていたことも確かである。上村さんも最後に述べていて重要だと思うのは、マニ教徒が駄目なのは探求しないからであって、探求するのなら *parvuli* になりうると述べていること。アウグスティヌスにとっては、一方で学問によって探求するということが、他方で聖書を介して探求するということが、この両方があったと思う。樋笠先生の指摘には自分も同意する。この時期アウグスティヌスと探求の共同体の内には知識人であったらうし、読者としてそのような知識人コミュニティーが想定できるのではないか。

上村 直樹

古代哲学以来の「幸福な生」*beata vita* の探求は、確かにアウグスティヌスの大前提になっている。アウグスティヌスの初期においては、一方で聖書解釈が組み込まれる上

昇プログラムが軸となっており、他方で自由学芸の上昇プログラムがある。ここで付け加えることがあるとすれば、『秩序論』*De ordine* の位置づけの問題である。第二巻の後半部分でも自由学芸、更に哲学を頂点とするような七つの上昇階梯が想定されている。この時期、聖書を解釈するというプログラムにも、アウグスティヌスは自覚的になっていると考えている。

柴田美々子

上村さんが *parvuli* に焦点を当てられた点は興味深い。第一巻二節のところで、マニ教徒が揺さぶってくることに對して、答えることができない人々が *parvuli* であるという明確な限定がなされている。そのような人々のために、*De Genesi contra Manichaeos* が書かれたと理解してよいのか。

上村 直樹

parvuli の問題だが、それを読者として設定できるかという点と未だ難しいと思う。より具体的な形で、テキストから *parvuli* を抽出する必要があると考えている。

■ 可視的世界の位置

柴田 有

アレクサンドリアのフィロンに『律法のアレゴリア』
Legum Allegoria という、『創世記』第二章の注釈をした著作がある。アレゴリアという方法は、ストア派にも見られるし、フィロンを始めとするヘレニズム・ユダヤ教にも広く見られる。アウグスティヌスに先行するアレゴリアの例を見ると、感覚的なものを解釈し直して、霊的・不可視的な意味を取り出すという形が共通である。その解釈の過程で可視的世界はどうなるのかと言えば、使い捨てできない。それ固有の重み、すなわち知性的な意味に解消されないような固有の位置、固有の意味は認められない。これが二世界論に立ったアレゴリアなのである。この二つの世界、感覚的世界と知性的世界との分断は、特にマニ教などでは顕著なわけだが、アウグスティヌスにおいては、聖書解釈が、この二つの世界の掛け橋のような役割を持っているのではないか。フィロンなどでは、天は知性的世界、地は感覚的世界とされ、両者がどのように繋がるかは明確

に述べられないまま、何かプラトン主義的な上昇が志向されてゆく。前述のような解釈法はアウグスティヌスに特有なのではないか。

水落 健治

熊田先生が先ほど注目して下さったことでもあるが、第一段階で、「可視的なもの *visibilia* を信じる」と述べられている。そして第二段階でそれを霊的なものから分ける。この連続性が重要で、結局 *visibilia* のなかに霊的なものが隠れているだと思う。最初から二つに分けるのではない。自分が今取り組んでいる *De dialectica* では、言葉の問題が論じられているわけだが、言葉そのものの中にメタ言語を見つけてゆくことをやっている。言葉そのものの中に、言葉そのものを指す記号、しるし *signum signorum* があるということである。そのような連続性をアウグスティヌスはかなり自覚的に考えていたように思う。

柴田 有

第一巻四十三節の七つの階梯は、人間が業を含めて成長してゆく過程である。それに対して、第二巻の五、六節で

アレゴリアを介しながら述べるくんだりでは、墮罪によって不明瞭なものになった人間の言葉が、原初の言葉に戻る浄めの過程として出てくる。

水落 健治

アウグスティヌスがよく使う言葉に「痕跡」*vestigium*という言葉がある。何かの「跡」のようなものを指すわけだが、それが地上の言葉を指している。

荒井 洋一

先ほど問題になった第一日目の「可視的なものを信じる *visibilis credit*」という表現は大変面白い。この部分に関してはエドモンド・ヒルの注釈で、マニ教徒に対する批判が背景にあるという指摘があった。つまりマニ教徒たちは、*visibilis credit* せずに、それを捨て去るということである。この言葉の意味についても少し説明して頂きたい。ここには *De Genesi* という人間の神の創造に対する信仰があるのと同時に、イエスの受肉のようなことも考えられているのではないか。

上村 直樹

必ずしも受肉のことは考えていない。目に見えるものを信じるという、ここでの *fidis* は、そういうものしか信じられないという否定的な意味ではなく、歩み出しの基本として述べられていると思う。ヒルの注釈は知らなかったが、マニ教徒たちはまずここで躓くのだと思う。

秦 剛平

参考として申し上げたい。フィロンの霊的な解釈はキリスト教世界には入っていったが、ラビの世界には入っていかず、霊的解釈という方法はユダヤ教では無視されていた。ユダヤ教での解釈は、毎週シナゴグで行われることであって、キリスト教的なものとは全く異なっている。

■ 魂の分有

柴田 有

今日の創世記註解第一卷四三節で四日目の出来事とされている、魂による真理の分有 *veritatis participo* であるが、そのように真理に与る魂が、身体に秩序と美を与える

とされている。ここには、魂が主導して人間が完成してゆくという考えが見られる。

今 義博

パウロの言葉には、精神の活動が体を向上させたり、墮落させたりするというものがあつたと思う。エリウゲナに關して言えば、精神が体を創造するというような言い方までしている。ただエリウゲナの場合は、アウグスティヌスよりマクシモスとの繋がり、精神が身体を創り直すということを考えただろうと思う。

熊田陽一郎

同じ四日目のところだが、*anima* に真理である太陽が輝くとされ、肉体に作用する *anima* は月として述べられ、*intellegentia spiritualis* が星として語られている。これはどのように理解すればよいのか。

上村 直樹

この太陽、月、星による比喩がアウグスティヌスにおいて一貫しているのかどうかは分からない。確かに、ここで

は光るものが序列化されているように見える。まず不変の真理 *incommutabilis veritas* があり、それに魂が与る。そしてそれによって身体が輝くという順番があり、その序列がアウグスティヌスにおいて一貫したものであるのは間違いない。しかしそれが、何らかの伝統によってこの光の比喩と結びついているのか、これについてはよく分からない。

柴田 有

今日は、テキストの読みが深められると共に、問題も深められ、実り豊かな討論の時間を過ごすことができました。ご苦労さまでした。

第一〇五回教父研究会

(二〇〇三年六月二八日 於聖心女子大学)

司会者 柴田 有 (明治学院大学)

発表者 上村 直樹 (千葉大学)

発言 樋笠 勝士 (神田外語大学)

熊田陽一郎 (中央大学名誉教授)

水落 健治 (明治学院大学)

荒井 洋一（東京学芸大学）

秦 剛平（多摩美術大学）

今 義博（山梨大学）

柴田美々子